

連携研修特別委員会報告

連携研修特別委員会 委員長 宮下義弘(都大泉桜高校長)

前回の会報124号にて、現状について報告をさせていただきましたが、都数研総会後の第3、4回特別委員会で話し合った結果について、以下に報告を致します。

1 連携研修の年間計画について

日程は、5月の常任理事会で提案した日程のとおりとすることを確認した。内容については、以下のように実施したい。

○都数研総会 5月

- ・総会に引き続き研究発表40分×2本(5分科会の中の2分科会より)総会後の研究発表は、連携研修には含まれない。

○第1回連携研修 6月中旬

- ・VTRによる研究授業、研究協議会(5分科会の中の1分科会より)

○第2回連携研修 7月上旬

- ・講演会の演題は、「高校の数学教育に望むこと」とし、大学教授に依頼予定
- ・研究発表40分×1本(5分科会の中の1分科会より)、各分科会の活動報告

○第3回連携研修 11月中下旬

- ・研究授業、研究協議会(5分科会の中の1分科会より)

※第1回の研究授業については、研修センターの研修案内に掲載する関係で、日程と内容を25年度中に決定しなくてはならない。26年度時間割が決定していない中で授業者を決定することが難しいのでVTRによる対応とした。(研修センターがVTRによる研修を可とするか否かは申請後に結論が出る見込み)

2 上記1に関する補足について

各分科会が、毎年研究発表か研究授業のいずれか1つを受け持つことになるが、どの分科会がどこを担当するか、決定方法はどうなるのか。原則として、都数研HPに掲載されている分科会の順番に輪番とする。ただし、毎年スタートは1コマずつスライドさせる。調整は、前年度の10月の常任理事会で各分科会の世話人が行う。

3 連携研修手続きに関する日程について

①8月30日 連携研修参加申し込みを提出。

②9月6日 平成25年度第2回教育研究普及事業説明会

平成26年度 教科等・教育課題研修「各種研究団体との連携研修」についての説明があり、吉田亘校長(都立田園調布高)及び、宮下義弘校長(都立大泉桜高)が出席し説明を受けた。

③10月15日 研修シラバス(案)の提出(電子データ)

④11月上旬 研修認定について検討及び結果の通知

⑤12月上旬 研修案内記載用のシラバス作成・確認

⑥平成26年2月末 研修案内に記載 全校に配布

⑦平成26年4月下旬 研修内容・講師等の確認

⑧平成26年6月上旬 受講申し込み

※講演会は、外部に人材を求めなければならないため、テーマ「高校の数学教育に望むこと」に沿って人選する必要がある。講師は、最終的に研修センターとの確認後に依頼する。下條会長はじめ、常任理事、理事、世話人の先生方にも、情報提供など御協力をお願いしたい。

特別企画「座談会」に参加して

編集部 廣田憲一(都青山高)

東京都数学教育研究会が発行する研究集録も今年度第50号を迎える記念の年ということで、特別企画として、これまで都数研を支えてこられた方々をお招きして、今後の都数研や数学教育について語り合う座談会が、編集部主催のもと、8月20日(火)にフロラシオン青山にて行われた。お招きした先生は以下の通りである。

都立日本橋高校	竹村 精治 先生
私立明星中学高校	北原都美子 先生
都立田園調布高校	吉田 亘 先生
都立大泉桜高校	宮下 義弘 先生
都立板橋高校	茂出木祥高 先生
都立青山高校	逸見由起子 先生

座談会は二部構成で行われ、第一部では、都数研での活動について、今までを振り返り、思い出に残っている出来事や、研究集録の制作、今年復活した会報等についてのお話をうかがった。先生方々々々都数研に入会した経緯は違えども、「数学の教科指導力を向上させたい」、「数学の専門性や知識を身に付け、生徒に還元したい」といった気持ちを、皆強く持って活動に臨んでいることが言葉の節々から感じられた。

また、研究活動の集大成である研究集録など、長年蓄積してきた成果をデータベース化し、いつでもどこでも活用できるように整備すべきといった話もあった。都数研の会員だけの情報提供に留まるのではなく、日本全国に向けて発信する「研究集録」の作成に取り組んで欲しい、という意見は、今後の編集部の大きな課題となる。

次に、第二部では、数学教育において大切なことや、新しい学習指導要領について、そして今後の数学教育に対する期待等の意見交換が行われた。

「数学教育において、生徒の興味・関心を引き出し、学習意欲を向上させるために、先生方が試行錯誤されながら、一生懸命教科指導に努力されてきた様子を存分に知ることができた。

数学教育は、ただ単に公式を覚えさせ、問題を解かせる、といった短絡的なものでなく、山登りのように、上に行くほどいろいろな景色が見えるようなものである。一つの解法しかないと思っていたら、勉強していくうちに、様々な道が見え、習ったときには何に使うかわからなかったものも、勉強しているうちに道具となり、使い方にも組み合わせが増えていく。その道具を与え、いかに使わせるかが、数学教育の醍醐味なのではないか」という言葉が私は印象に残った。生徒に対して、その道具の使い道や便利さに気付いたときの感動を与えられる教員になれるよう、これからも教科指導力の向上に尽力していこうと改めて感じる事ができた会であった。

そして、この都数研が、向上心あふれる教員の研鑽できる場として今後さらに発展していくことを強く願う。

※座談会の詳細については、平成26年3月に発行する研究集録第50号特別企画に掲載いたします。